

て警告を発しております。理性的、論理的に未来を考えてみましょう、農業に依存しなければ成り立たない農業に人類の未来を託するわけにはいかない。豊かな生態系を保つ農業が、いまこそ求められているのです。

○ 有機農業と自然農法について

初めに言葉の定義をはっきりしておきましょう。欧米の都市の農産物市場にはオーガニック・コーナーがあり、ここでは化学肥料と農薬を一切使用しないで生産された食品が売られています。わが国ではこうした農産物を生産するのを「有機農業」と呼んでおります。その生産原理は、明治時代までの伝統農業を継承したもので、農地の生産力を有機物の施用や客土(土作り)で高め、その力を農産物の品質と収量に反映させようというものです。

ご承知の通り、明治維新後には西欧からあらゆる科学技術を導入しました。農業の近代化が推進されました。農業の分野でも、国民の主食であるコメの安定生産について

は、冷害に強い品種の開発に西欧伝来の育種学が大きく貢献しました。

また、化学肥料の導入は飛躍的に収量を増やしました。これは、世界中どこにでも見られる現象ですが、化学肥料のうち、窒素(チッソ)肥料の増収効果は最高です。だが、これの多用は必ず作物病害が多くなります。また、作物が軟弱に育って、害虫への抵抗力が弱くなるため、農薬が必要となります。つまり、化学肥料と農薬がセットになったのが現代農業の中身だと言えます。

さらに農業の機械化は、生産に莫大な化石燃料を投入します。また、カリやリンなどの化学肥料資源も有限な地下資源という認識が強まりました。農業の永続性という視点から現代農業を眺めると、土壌有機物の源である堆肥や家畜糞を与えないで、化学肥料オンリーの農業は短命であると言えます。土の生産力の源である土壌有機物が消耗しつくして、土は砂のようになるのです。

○ 利での誘導は農の本質を損なう

欧米では、地球環境の永続性(sustainable)という視点から有機農業に熱い視線が注がれているのです。冒頭にあげたオーガニック・コーナーもその反映です。さらに、農薬が生態系の悪化をもたらすという認識が強くて、その使用には強い規制を行っております。この点では、わが国は後進国だと言えます。農業規制の後進性には、農業界の政治力と、農林系役人の天下り先の確保といった事情が深くかかわっていると、私は推測いたします。

残念ながら、わが国では従来からの農業者自身に、農業の永続性を問題とする視点が希薄でありまして、有機農業の実施面積は微々たるものです。有機農業の担い手の主力は、環境問題に目覚めた人たちです。

しかしながら、有機農業の中でも「自然農法」という用語を意識的に使う人たちもいます。その一つは世界救世教の教祖・岡田茂吉氏が提唱した農法で、岡田教祖自身医薬品の副作用を体験した思索から化学物

質そのものを毒と見なします。無化学肥料で稲作を続けられ、土壌から肥毒が抜けて必ず増収する、と言った論法で農法の普及を図りました。しかし、結果は期待に反しました。その後、EM菌万能のいかがわしい説のとりことなってしまうました。

自然農法を称するもう一つの流派は、愛媛県の福岡正信氏の唱えるもので、その考え方は、「中国の老荘思想」に基づいていますので、自ずと現代化学批判となっております。これがマスコミの注目を引きました。しかしながら、「科学知を離れるほどイネは増収する」と説きます。私は福岡さんと旧知の間柄でありますので、たびたび田んぼを見学に行きましたが、どこにも増収イネは存在しませんでした。彼は「可能性を説いている」と言いましたが、やがて増収するという説を信じて「福岡式自然農法」の実践で失望した若者が多数いることは事実です。増収という利の魅力をもって、精神的な要素の多い有機農業を進めることは、その第一歩から間違っ